

デンタルダイヤモンド／2015. 11月号（中島副委員長 記）

○実践歯科ライブラリー：歯周治療がうまくいかないのはなぜか？（佐野哲也）

＊歯周病は、40 歳以上の成人の 8 割以上が罹患しているといわれ、歯科医師はそれを予防し改善しなければいけないが、うまくいかない場合も多い。本特集では、①臨床で見落としがちなポイントとして、診査・診断、治療計画の重要性として、1 歯ごとの診断を 4 つの病態に正確診査に分類すること、一口腔単位で治療計画を立案し、患者さんに詳細に説明し、理解と治療への参加をしてもらうことの重要性を呈示している。つまり、「歯周治療では主人公は患者自身で、患者が治療に参加しなければ歯周治療は成功しない」としている。②根分岐部病変の治療の難しい理由として、Ⅱ度以上の分岐部病変では、歯の喪失リスクは約 3 倍以上になるが、Ⅰ度以下の分岐部病変とするには歯周外科や再生療法が必要なことを上げているが、患者のブラークコントロールが良好であれば、Ⅱ度以上病変でも、保存可能であることを示している。③歯周治療の歴史に学ぶとして、現在注目のインプラント周囲炎治療の最前線について、記載しています。勉強になる内容でした。

○ODd ネグレクト防止セミナー：子どもの虐待の早期発見のために歯科ができること

（香西克之・渡部 茂・長尾正崇・山崎健次）

＊小児患者を多く診る歯科医師や歯科衛生士は、子供の成育環境の異変に気付くことのできる数少ない職種のひとつであり、気づく目を持ってほしいとのことで特集が組まれています。子供の虐待の現状と対応、症例、対応が提示されています。是非ご一読ください。

歯科評論／2015. 11月号（居樹副委員長 記）

○特集／支台築造を検証する—ベーシックな手法とするために必要なこと（池上龍朗 他）

＊ファイバーコアが臨床に導入されてやく 10 年になります。そして 1 月から保険でも認められるようになりました。そこで支台築造を再考するというのが本特集です。支台築造をいい加減にすると歯根破折、コアの破折、補綴物の脱離など様々な問題を起こします。補綴物を長期にわたり良好に維持するために、一読し臨床にフィードバックすることをお勧めします。

○「食べる」を最期まで支える口腔ケア—これならわかる！ 始められる！

開業医のための口腔ケア実践のポイント 第3回 口腔ケアでのトラブルを防ぐために（山家祐美）

＊開業医のための口腔ケア、連載第3回。高齢者の口腔ケア中、時にトラブルが発生する危険があります。高齢者は様々な疾患を抱えている場合が多いので、常に観察し続けることが重要になります。口腔ケア中のトラブルを未然に防ぐには、そして起こりそうになったらどう対処するか、是非チェックしておきましょう。

ザ・クインテッセンス／2015. 11月号（岡崎副委員長 記）

○GPこそ、不正咬合の予防に取り組もう²

GP が早期に診るべき子どもの機能異常、形態異常（堀口靖史）

＊不正咬合の要因を早期のうちに見つけ出すために、次のことを診る。①口呼吸の有無②態癖の有無③舌の位置、口蓋の形態④嚥下法⑤口唇の形と動き⑥永久歯の萌出具合。また、原因となる機能異常を探り当て、機能と形態の悪循環を断ち切る必要がある。そして崩れ始めた形態は予防矯正装置で修正し、筋機能訓練ができる環境に改善する。保健指導と同時に動機づけも重要で保護者には最終的にどうなれば良いかの「大きな目標」を、子どもには自発的にがんばるように現状と達成像を理解させて自覚を促し、達成可能な「小さな目標」から約束していく。記録ノート、スタンプラリー、ご褒美シールなどは有効である。また、子どもを褒めるときは保護者の目の前で行う。

○歯科矯正用アンカースクリューテクニックを紐解く（米澤大地）

＊歯科矯正用アンカースクリュー（TADs）の紹介とその使用症例を解説し、そのなかで絶対的固定源を用いるメリットとして次の4つを挙げている。①抜歯矯正によって得られたスペースを最大限に牽引することで最大限の審美的な改善が見込まれる②臼歯関係の改善が圧倒的に自由になった③保存不可能な歯を抜歯できるようになった④従来不可能であった大臼歯の圧下治療ができるようになった。但し、GP である筆者は機能回復のために矯正治療を選択するという考えから、正しい顎位・臼歯関係・犬歯関係を確立する上で TADs の存在は大きいとしている。

歯界展望／2015. 11月号（小野委員長 記）

○特集／歯内治療は変わったのか？—ベーシックからの見直し—（長崎県開業 神田 亨 他）

＊今月と来月の2回にわたる特集である。今月は「変わったこと」「変わらないもの」を検証し、また特に「難治性」と言われる根尖性歯周炎についても、細菌学的観点から考察している。変わったことはやはり、機材、材料の進歩である。コンビームCT、マイクロスコープ、Ni-Ti ロータリーファイルの進歩の三つは注目されていると思う。これにより、正確な診断や効率的治療は可能になったと言える。しかし、歯内治療の根底にあるもの、感染源の除去と根管内をより無菌的に密封するということは、今後も変わらないと考えられている。このあたりを念頭にこの特集に目を通してみてはいかがでしょうか？